花菱草(私を拒絶しないで)

神童サーガ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

花菱草（私を拒絶しないで）

【Ｎコード】

Ｎ３２５５Ｆ

【作者名】

神童サーガ

【あらすじ】

特殊能力を持つ少年と少女。だが、少年は世界を怨み人を憎んでる。その少年の成長する話。

Ｃｈａｐｔｅｒ１　貴方との出会い（前書き）

まだ、出会ったばかりだから二人の関係は微妙です。いつかラブラブになれたら良いなと・・・

Chapter1　貴方との出会い

コノ世界は憎い。
だから、僕は“この能力(ちから)”を使って、壊す。
誰にも邪魔はさせない。

「・・・ボソッ」
「・・・ボソッ」

僕が、学校に行く度にざわつく教室。
腹が立つ。

「お前ら・・・」
「っ！！」

低い声により、周りが縮こまった。
情けねー奴等。
でも、今日全てが狂い始めたんだ。

「はい。席に着け！！」

ガタガタと机の音を鳴らしながら周りは座る。

僕も嫌々ながら座る。
僕の隣りは誰も座ってなくて、前の奴は凄い離れてる。

「転入生だ・・・来い」

ガラッと扉を開けて入って来た奴は、クラスの女よりも可愛い奴だった。
藍色の髪で三つ編みを両脇にしてて、いかにも優等生という感じだった。

「あ、あの・・・涼宮　ブランカといいます」

変な名前だと思った。まぁ、僕も人のことは言えないけど。

「席は・・・相原・・の隣りだな・・・あの銀髪の」

はあ？僕の隣り？
ふざけんなよ。今までいなくて楽だったのに・・・

「あの・・・よろしくお願いします」

ムカつくからシカトした。

泣き出すかと思ったがケロッとしてた。
つまんねー・・・
授業始まった。
聞く気ねーから窓の外を見る。
隣りをふと見ると涼宮もサボってた。
シャーペンをずっと見つめてた。
何してんだ？

「あ、あの・・・相原くん」

話し掛けてきたがシカト。
うぅ、と声を上げて黒板を見た涼宮。
おもしれー。からかい甲斐がある。
でも、僕は人間が嫌いだから構いたくない。

「・・・ねぇ」
「うるさい・・『黙れ』」
「っ！！」

僕の能力は、命令さえすれば、命令のとおりになる。
だから、涼宮も黙った。

「・・・・っ」
「（アイツ・・・転入生に能力使ったぜ？）」
「（やっぱ化け物だよな）」

「・・・・」

まただ、黙ってれば良かったのにな・・・

「『全員・・・今日喋るな』」

僕の言葉に皆が驚き、言わなくなった。いや、喋れないんだ。
僕は、教室を出た。

「・・・・」
（見付けた・・・彼なんだ・・・）

私は、彼が出てった扉を見つめてた。
そして、ノートに書いた。

『・・・みんなの声を戻せ』

と・・・
すると。

「っ・・・あれ？」
「喋れるぞ！！」

「なんで！？」
「あれ？転入生は？」

私は、微笑んでから教室を出た。
彼の後を追うために・・・

「・・・クソだりー」

僕は、ゲーセンにいた。
腹が立ってたせいもあり、格ゲーをしていた。
乱入してくる奴等をコテンパンにやっつける。
ゾクゾクしてくる。
楽しいなぁ。弱い奴等が無様に殺られるのが。

「見付けた」
「！！」

せっかく楽しんでたのに・・・誰だよ邪魔しやがって・・・

「なっ・・・」

コイツ・・・転入生の。それに、声を封じたはずなのに・・・

「・・・見付けた。私の・・・」

何言ってんだ？
頭おかしーんじゃねーの？

「旦那様」
「はあ？お前・・・頭おかし・・・」
「あ・・・えっと」

僕の言葉を遮り顔を赤めた。
可愛い子の照れた顔は、良いが今は厄介な存在だ。

「お前・・・何者？」
「あなたと同じ」
「・・・」
「私は書けば、そのとおりになるの」
「僕が声ならキミは手なんだ」
「はい！！」

利用出来ないか？
僕と同じなら・・・
ふっ・・・使わせてもらおうじゃねーか、その能力（ちから）をよ・・・

次の日、学校に行くとまた騒ぐ教室。
ムカつく・・・

「『・・ころ』」
「おはよう相原くん」
「！？」

ちっ・・・
また邪魔しやがった。

「ダメだよ・・・殺すなんて・・・」
「！！」

僕の考えてることが分かったのか・・・
本当にムカつく女だ・・・

「なんのことだ？」
「・・・やっぱ・・・違うんだもんね」
「はあ？」

小さい声でボソッと言ったから聞き取れなかった。何を考えてんだ？

・・・先生が来たから全員座った。

「相原くん・・・」

またシカトした。
ウザいこの女。

「その力に・・・惑わされないで」
「！！」

何が言いたい？
僕の気持ちなんて誰も分からないのに・・・

「・・・お前なんかに」
「ごめんなさい・・・」
「っ・・・」

謝んな・・・
惨めになる。
イライラする。

「でも・・・貴方なら大丈夫だから」

何が大丈夫なんだよ。
分からない。
こいつ・・・・
優しい笑顔を向けんだよ。僕は、お前を利用しようとしてんだぞ・・・
・
僕は・・・・
僕は・・・・

Ｃｈａｐｔｅｒ１　貴方との出会い（後書き）

あぁ早くラブラブさせたい！！でも、まだ成長には早過ぎるし・・・

Ｃｈａｐｔｅｒ２　変わりはじめる心（前書き）

少しづつ変化が出てきた少年。それでも否定したい心。

Chapter2　変わりはじめる心

「なんなんだ？」
「着いて来て？」

急にコイツが言い出した。そうだ・・・

「『動くな』」
「！？」

書くことで能力が無効にするなら、動けなくすれば、意味がない。
僕に関わるな。

「待って！！お願い！！話しを・・・話しを聞いて！！」

イヤだ。関わりたくない。
僕は、一人が良いんだ。誰も僕を傷付けないから。

「っ・・・なんで・・・泣くんだよ」

信じたくないけど僕のために泣いてるの？

胸が痛んだ。
理由は分からないけど。

「・・・話しだけなら」

おかしい。
なんでだよ。
聞く気なんて無かったのに・・・

「ありがとう！！」

微かに心臓が速くなった。信じたくない。
僕はイヤだ・・・
笑顔を向けんなよ。

「で、なんだよ」
「私達は、信じられないけど・・・この世界の人じゃないの」
「はあ？」

頭がおかしいのか？
異次元なんてあるわけねーだろ・・・

「じゃあ私達の能力をどう思ってる？」

コイツ・・・僕の心読んだのか？

「能力・・・邪魔だ」
「未来では、そう思わないけどね」
「は？」
「・・・あ、異世界の話でね。私達の先祖が、ある人によって飛ばされたの」
「それが、この世界か？」
「うん・・・」
「バカらしい・・・」

話逸らされた上になんだよ異世界なんて・・・
有り得ねーだろ。

「言葉や文字には・・・魂が宿るって言うよね」
「あぁ・・・」
「能力を使う度に・・・知らずに魂を込めてるの」
「命には？」
「ううん・・・この世界にいれば何とも無いの・・・・でも」
「でも？」

歯切れが悪くなった。
何なんだよ。
何かあるのかよ。

「・・・この世界に飛ばした人がいるって言ったよね？」
「あぁ・・・」
「いつか・・・現れるかもしれないの」

ふ～ん。どうでも良い。
僕ならソイツをやっつけることは出来る。

「だから？」
「ううん・・・心にとどめておいて」
「・・・」
「それだけ・・・・だから・・・じゃあね相原くん」

いつの間にか僕の能力が解けていた。

「あ、まて！！」
「え・・・」
「あ・・・」

何言おうとした？
コイツなら僕の気持ちが分かるなんて思ってるのか？

「・・・名前で」

「???」
「名前で呼べ・・・」
「・・・ごめん」

な、なんで謝るんだ？
嫌なのかよ・・・
さすがにショックうけた。

「名字しか・・・分からないの」

あ・・・
言ってなかった。
先公も名字で呼んでたし・・・

「相原アザミ」
「アザミ・・・くん」
「なんだ？」
「えへへ・・・呼んでみただけ」
「ウザい」
「う、うぅ～」

嬉しかったのかもしれない。
だけど、素直になれなかった。
泣き出したよ。
本当にウザい。

「・・・ブランカ」
「うえ！？」
「何でもねーよ」
「・・・・ふふ」
「なに笑ってんだよ」
「な、何でもないよ！！」
「笑ってる！！」

あああああ！！
恥ずかしい！！

「帰る！！」
「うん！！明日ねアザミくん」

また笑顔で言った。
僕はコイツの笑顔は嫌いじゃない・・・・かもしれない。
コイツは・・・ブランカは僕の能力に怯えない。僕を唯一見てくれる。

「やっぱムカつくけど・・・」

次の日の学校。
なぜかワクワクしてる自分がいた。
最悪だぁ！！

「おはよ！！アザミくん」
「・・・・あぁ」
「もう！！最低限の抵抗しないでよ！！」

また話し掛けてきた。
なんで僕に構うんだ？
嫌われるぞ？

「転入生が・・・」
「アイツ頭変なんじゃねー？」

イライラする。
コソコソ喋って・・・
ふざけんなよ！！

「お・・・」
「黙りなさい！！」
「な・・・」

僕の言葉をまた遮り怒鳴った。
なにを考えてんだよ。

「貴方達のそういう行為が子供なのよ！！いい加減大人になりなさい！！」
「な・・・化け物の仲間なんじゃねー？」
「自分が不利になったからって、その言葉で片付けるな！！」

すげー・・・
言い返せてねー。
口防いだし。

「悪口なんて自分を傷付けるだけなんだから止めなさい！！分った！？」
「は、はい！！」
「分ったなら良いよっ！！」

イラッ・・・
ブランカの笑顔にクラスの男子全員が赤くなった。
なんでムカつくんだよ。
意味分かんねーよ・・・
最悪だ。ムカムカするし。クラスにいるの嫌になったし・・・
僕は、教室を出た。

Ｃｈａｐｔｅｒ２　変わりはじめる心（後書き）

あああ！！早くラブラブにさせたい！！

Ｃｈａｐｔｅｒ３　彼女の影（前書き）

いきなりが多いです。少し謎が謎を呼んでくる。

Chapter3　彼女の影

「待ってアザミくん！！」

なんで追って来るんだよ。
着いて来るなよ・・・

「お願いがあるの・・・」
「んだよ・・・」
「・・・」

また赤くなったし・・・
何なんだよ・・・

「アザミくんの家に住まわせて！！」
「はあ！？」

な、何言ってんだよ・・・
一応だけど、僕は一人暮らしだ。
それなのに・・・

「・・・何で？」

「わ、私・・・家が無いの」

そんなの有り得ない。
多分・・・家出だな。
オロオロしてるし・・・

「ダメだ」
「はぅぅ・・・」
「昨日まではどこに居たんだよ」
「・・・・公園」
「はあ？」

アホなんじゃねーか？
外だなんて・・・

「あぶねーだろ！！」
「うぅ・・・ごめんなさい」
「何考えてんだよ！！」
「・・・だって」
「だってもくそも無いだろ！！」
「・・・無いの」

おかしい・・・
無いなんて・・・
家出という感じじゃない・・・

「・・・言えねーのか？」
「・・・ごめんなさい」

何なんだよ・・・
僕に言えないことなのかよ・・・
・・・・・って、何考えてんだ？僕・・・
気にする必要なんて無いのに・・・

「分った・・・住んでも良い」
「ホント！？」
「ただし」
「？？？」
「明日から夏休みだろ？」
「そうだっけ？」
「あぁ・・・家事出来るか？」
「うん！！得意だよ！！毎日作ってあげてたから」
「誰に？」
「へっ？・・・・・な、内緒！！」

まただ・・・
コイツ・・・秘密にしてることが多すぎる。
まぁ良い・・・
家事しなくて済むからな・・・
いい様に使ってやる・・・

「うわ～大きい！！」
「・・・そうか？」

たしかに一人暮らしには一軒家はデカいな・・・
なっ！！
なんで懐かしそうな目してんだよ。

「おい」
「え！？」
「お前・・・ここ知ってんのか？」
「！！」
「・・・なんでだ？」
「・・・いつか、話すから・・・まって」
「・・・仕方ないな」

僕の能力を使えば聞くことは出来るが・・・
なぜか聞く気が無かった。

「腹減った・・・なんか作れ」
「分ったよ・・・」

キッチンに向かったブランカは冷蔵庫を見る。
そして、包丁の音やフライパンで何かを焼く音がしてきた。

「いい匂い・・・」

美味しそうな匂いに腹がなった。
誰もいなくてホッとした。

「出来ました～！！」

ブランカが持って来たのは、焼きソバ・・・

「・・・」
「あれっ？嫌いだった？」
「いや・・・大好物」
「ホント！？良かった！！」

また笑顔だ。
不覚にも可愛いって思ってしまった。

「食べて？」

コトンとテーブルに置いた。
色のバランスも良くて、見た目も綺麗だ。

「んっ・・・・・旨い」

長年作り続けてるって感じだ。
僕好みの味だった。
僕の言葉に笑顔になった。
やっぱムカつく。美味しいなんて・・・

「お前・・・」
「ブランカ！！」
「・・・・・ブランカは食わねーのか？」
「・・・・うん。私は良いの！！」

まだ、僕は気付いて無かったんだ。
彼女がいつも見せる暗い影に・・・
彼女が背負ってる宿命に・・・

Ｃｈａｐｔｅｒ３　彼女の影（後書き）

う～む謎は謎です。ラブが足りない（しつこい）

Ｃｈａｐｔｅｒ４　見えない敵（前書き）

またいきなりだぁ。素直じゃないなぁアザミくん・・・

Chapter4　見えない敵

「どこ行ったんだよ」

ブランカがいなくなった。
二、三日ブランカの姿が見えない。

「気になってなんかいない・・・絶対に」

たった数日一緒に暮らしてるからって・・・
なんでイライラすんだよ。

「捜しに行くんじゃない・・・・か、買い物だから」

誰に言い訳してるか分からない。
でも・・・

「見つからない・・・」

数時間の買い物だってあるんだ。決して捜してるんじゃない。

「・・・遠くまで行くかな」

違うぞ？近くのスーパーに無かったから遠くまで買いに行くだけだから。

「ん・・・？」

紙・・？
なんか、僕に向かってきた。
誰かの能力か？

「ブランカ・・・？」

違う・・・
字が違う・・・
男の字だ。

［ブランカは預かっている。助けたくば、“文字を変えると違う場所になる廃墟”に来い］

はあ？
暗号かよ・・・
めんどくせー・・・
助けに行くわけ無い。

真夜中

「くそっ・・・寝れねー」

気にしてなんかいない。
なのに・・・
アイツの笑顔が消えない。

「文字・・・か」

考えるのは嫌いだ。
誰かのために・・・なんて一番嫌いだ。
ムカつく・・・

「っ・・・」

頭を掻き回す。
あぁ・・・腹が立つ！！
誰なんだよ！！

「・・・・この世界に飛ばした人？」

そういや・・・ブランカが言ってたな・・・

「助けるためじゃないからな・・・僕に不幸が来ないために潰すだけだからな」

また言い訳してる。
いつから、僕は変わったんだろう？
こんな風に一生懸命になってるなんて・・・

「昔は・・・ムカつく奴全員片っ端から潰してたのに」

それなのに・・・
今はどうなんだ？
まだイライラしてるが、潰したりはしてない。

「・・・・毒だな・・・それとも麻薬か？」

ブランカの笑顔が頭から離れない。
最近は・・・嫌では無い自分がいる。
まだムカつくけど・・・

「取り敢えず暗号か・・・・」

変換・・・ね。
廃墟って言えば・・・

「・・・病院や町・・・寂れた店とかだよな？」

ん？病院？

「びょういん・・・・・」

簡単過ぎねーか？
僕をおびき寄せる罠ってか・・・

「美容院と病院・・・どっちの廃墟だ？」

この近くに廃墟なんてあったか？

「あそこ出るんだって～」
「何が？」
「幽霊よユーレイ！！」
「あの病院・・・ミスがあって沢山の人が亡くなったんだってね」
「！？」
「怖いね～」
「おいっアンタ！！」
「は、はい！？」

赤くなってる女は、この際無視して。僕は気になることを聞いた。

「そこはどこだ！！」

焦ってるなんてらしくない・・・
こんなに怒鳴ったなんて何年ぶりだろうか。

「どこだ！？」
「あ、近郊に・・・」
「近くか！？」
「あ、あっちの方に・・・」

女は、手入れされてる指で森の中を指した。
僕は、その方を見た。
木が沢山あったが、ある部分が伐採されてあり、そこには白い建物が見えた。
僕はそこへ向かった。

「無事で・・・なんて」

らしくない・・・
でも、僕を怒らした罪は重いからな・・・

Ｃｈａｐｔｅｒ４　見えない敵（後書き）

好きという気持ちには気付いて無いと思う。ただ気付きたく無いってのもある

Ｃｈａｐｔｅｒ５　彼女の秘密（前書き）

だんだんと影が消えかけてくる。秘密があっても愛せるか・・・

Chapter5　彼女の秘密

「ここか・・・」

二時間も掛かってしまった。
廃墟の入口に立つ。
静かで何も聞こえない。
だけど、二人気配がある。

「やっぱり来たな」
「誰だよアンタ・・・」

白いスーツにシルクハットで目を隠してる。
だから顔は見えないが若い。
２０代か、もっと若いか・・・

「・・・っ」
「コイツを助けに来たのか？」
「ちげーよ」

ブランカは口を塞がれてる。
顔色が悪いな・・・
食べて無いからか？

「・・・」
「なぁ？ブランカ・・・」
「・・・？」
「アイツが死んだらお前は悲しむか？」
「っ！！」

目が揺らいだ。
泣きそうになってるのか？
アイツって僕？

「あ、そうだ『喋るな』」

なっ・・・
喋れない。
コイツ・・・僕と同じ？

「・・・」
「あぁ・・・悪いな。喋れなかったな」

ブランカの口に付いてるガムテープを外した。
勢い良く外したためか顔を歪ました。

「っ・・・痛っ」
「アイツに何も話して無いんだな」
「止めて！！」

なんだ？
なにを隠してんだ？

「言わな・・・いで・・・・」
「・・・くだらない」
「・・・っ」
「まだ愛してたのか・・・・」
「当たり前・・・よ」

愛してた？
だれを？

「未来を潰すのも面白い」
「ダメ・・・」

未来？
なんのこと？

「ガキ・・・コイツはな」
「言わないで！！」

「未来から来たんだよ」

は？
何言ってんだ？
ブランカが？
黙ってるってことはホントに？

「そして・・・ある奴の妻だ」
「・・・っ」

妻？
結婚してるのか・・・
イヤだ・・・
なんでズキズキすんだよ・・・

「何時戻るんだ？」
「・・・」
「未来の旦那が待ってんだろ？」
「・・・っく」

未来から来た・・・
なら戻るのが当たり前・・・
なんでショック受けてんだろ。

「あ～もう戻っても意味が無いな！！」

え！？

「・・・・っ」

泣いてる？
どうして・・・？

「死んだから・・・」

！？
死んだ・・・？
ブランカの旦那が。
それなのに、あんなに明るく振る舞ってたのか？

「っうく・・・止めっ・・・ひっく・・・」
「俺が殺したんだ」

なっ・・・
コイツ・・が？
許さない・・・
ムカつく・・・

お願いだから声出てくれ。
ブランカの泣き顔なんて見たくない。
アイツは笑顔が一番なんだ・・・
だから・・・
頼む・・・

「『止まれーーー!!』」
「なっ!!なぜ・・・封じたはず・・・なのに」
「ハァ・・・ハァ・・・」
「アザミくん・・・」
「っく・・・」

なんで涙が出るんだよ。
僕は何を望んだんだよ。

「どうしたら良い？ブランカ・・・」
「・・・」

コイツはブランカにとって憎き復讐相手だ。
僕がどうする事も出来ない。

「アザミくんが・・・」
「僕が!?ブランカが一番だろ？」
「・・・」
「？？？」

ブランカは黙った。
言うべきかどうか迷ってるようだ。

このあと、僕はとんでもない話を聞くことになる。
嬉しくあり、悲しくもある話だった。

Ｃｈａｐｔｅｒ５　彼女の秘密（後書き）

勘の良い人なら分るだろうね。いや、誰もが分るだろう

Ｃｈａｐｔｅｒ６　僕の存在意義（前書き）

・・・真相です。でも・・・お別れ・・・って悲しいものだよね。
例え、また会えるって思っても、その時間が長いから。

Chapter6　僕の存在意義

「・・・」

あれから数分経った。
ブランカは言うかどうかまだ迷ってる。

「ブランカ・・？」
「私が・・・何を言っても・・・嫌わないで」
「・・・あぁ」

本当に変ったな僕。
泣きそうな顔を見てたら胸が苦しむ。

「私の・・・未来の夫は・・・」

ズキッ
聞くのが嫌だ。
でも、聞かないといけない。

「・・・信じられないかもしれないけど」
「さっさと言え」

「怒ってるの？」
「・・・怒ってねーから早く！！」
「っ・・・ん。アザミくん」
「なんだ？」
「アザミくんが私の旦那なの」
「・・・・・」

とうとう僕の頭がおかしくなったか？
それとも耳がおかしいか・・・

「僕・・・？」
「うん」
「まて！！じゃあ未来の僕があんな雑魚に殺られたのか！？」
「ざ、雑魚って・・・（あれでも強いんだけどな）」

複雑だな・・・
嬉しい反面悲しい。
コイツの旦那って・・・
しかも、雑魚に殺られたのかよ・・・

「・・・だから、ブランカは僕にどうするか聞いたのか」
「うん・・・」
「殺すのはブランカ嫌だろ？」
「嫌だ・・・未来のアザミくんは、そんな事しないから」
「！！」

僕の未来はどんな奴なんだ？
過去を克服したのか？

「ブランカに考えはあるのか？」
「未来にいた時、考えてたのはあるよ」
「なんだ？」
「アザミくんの能力で・・・彼の記憶と能力を消して、元の世界に返すの」
「・・・なんで未来の僕はやらなかったんだ？」
「・・・」

また、何かあるんだな。
黙ってる。
言え・・・
内緒をつくらないで・・・

「アザミくんの・・・親友なの」
「！！」

親友？
だれと？
まさか、男との？

「・・・どういう事？」
「私と会う前に出会った唯一心を通わせた同性で親友」
「！？」

ってことは、僕からしたら未来で会う奴ってことか・・・

「お互い信頼し合ってたの」
「何が原因で壊れた？」
「・・・・私っ」

目に涙を浮かべた。
どういうことだろう。

「私とアザミくんはラブラブだったの・・・」

おいおい・・・
未来の僕・・・
何してんだ？

「だけど・・・彼も・・・」

何となく分った。
僕は彼を見た。

動けないままだったが、なぜか喋らなかった。
喋れたはずなのに・・・

「壊れてしまったの・・・私がアザミくんに会わなければ・・・」

言うな・・・
僕は・・・
たぶん・・・
未来の僕は、その言葉は苦しみでしかない。

「私が・・・」
「言うな！！」
「っ・・・」
「僕には分からないけど・・・二人に会えて良かったって思ってるはずだから・・・・僕よりも、ずっとずっと一緒にいたお前らが何で分かんねーんだよ！！」
「「！？」」
「未来の僕の気持ちを何で知ろうとしないんだよ！！」
「それは・・・」
「お前ら・・・本当に好きだったのかよ！！」

なんでか言葉が出てきた。
誰の言葉なんだろう。
僕自身のじゃない。
だって・・・
本心じゃないから・・・

「・・・ごめんなさい」
「・・・・・」
「アンタ・・・名前は？」
「・・・・・」
「・・・アザミくん？」
「お前の記憶消さねーよ」
「！！」
「未来の僕が消せなかったのに・・・今の僕が消して良いのかよ」
「・・・ふっ」
「アザミくんらしい・・・」

どういう事だ？
あまっちょろくなったのかよ・・・未来の僕。

「っくくく・・」
「アザミくん？」
「消さなくても簡単な方法があるじゃねーか」
「え！？」
「名前・・・言え」
「・・・未来に会える」
「・・・そうか。取り敢えず・・・お前未来へ帰れ・・・僕が誰も傷付けない未来にするから」
「「！？」」
「だから・・・僕を信じて・・・」
「・・・はぁ」
「・・・ダメか？」

「もし・・・変わって無かったら・・・また殺すからな」
「あぁ・・・」

絶対に約束する。
・・・約束なんて何年ぶりだろう。

「信じてるからな・・・」
「あぁ・・・『未来へ・・・』・・・」
「アザミくん？」
「どうした？」
「・・・・っ」

まてよ？
もし、コイツを戻したら、ブランカはどうなるんだ？

「ブランカ・・・」
「・・・彼と会うのは数ヶ月後よ」
「！！」
「私と会うのは・・・三年後・・・貴方が卒業した時に・・・」
「・・・なげーんだな」
「私は・・・外国にいるの・・・だから家が無かったの」
「・・・おいブランカ」
「なに？」
“あのこと”は言ったのか？」
「・・・」
「何だよ！！」

「・・・全ては五年後に」
「・・成人になってから？」
「・・・・えぇ」

なんで・・・
隠すんだよ・・・

「未来の僕は知ってんのか？」
「・・・知らない」

未来の僕でさえも知らない？

「早く・・・戻して・・・・」
「ふざけんな！！ブランカ残れ！！」
「っ！？」
「後で・・・全部聞くから」
「・・・ダメなのよ」
「なんで！！」
「長く居過ぎた」
「未来を更に壊す気か？」
「・・どういう事だ？」
「・・・コイツは外国にいるんだ」
「同じ人間が同じ世界に存在してはいけない」
「もう時間なんだぜ。これ以上は・・・」
「・・・・また一人になるのか？」
「・・・アザミくん」

「・・・・一人にっ！！」
「・・早く戻せアザミ！！」
「っ・・・アザミくん」
「・・・・・・・・『元の世界に戻れ』・・・・・・・っ！！？」

僕が能力を使った瞬間にブランカは僕に抱き付いた。
いや、優しく抱き締めたのだ。
ブランカ・・・
名前を呼ぼうとしたら光に包まれて消えてしまった。

「っく・・・ブランカ・・・」

自分が変ったのは、やっぱり君のおかげなんだ。
僕は、未来を変えるために・・・
成長しようと思う。
君がくれた優しさや雄大な愛を忘れない。

Chapter6　僕の存在意義（後書き）

ネタ無い・・・やっぱりラブラブさせたい（それ以外無いのか）

Chapter7　抜け殻（前書き）

もし好きな人と（ずっと一緒にいた人と）別れたら普通でいられるのか・・・

Chapter7　抜け殻

「・・・・はぁ」

ブランカがいなくなってから二か月が経った。
あの男が来るのは、あと何か月なんだろう。
ブランカに会えるのは？

「あ、でも・・・あっちは僕を覚えてないんだ」
「（相原・・・なんか変じゃねーか？）」
「（毒が抜けた感じだな）」
「（涼宮がいなくなってからだよな？）」

授業も頭に入らない。
何もしたくない。
なんか・・・ダメ人間だなぁ僕・・・

「！！」

僕が席を立っただけでクラス全員がビビる。
でも、僕は気にすることは無い。

「・・・昔とだいぶ変ったな」

自分でも分る。
ケンカや能力を使ってた。
武力行使だった。
ブランカを一目見てからだ。
未来の僕も、ブランカだから好きになったのか？
もし、ブランカに会う前に別の奴と付き合ってたらブランカはどんな反応するかな？
もしかして、あの男と付き合うかもしれねーな。
・・・・やっぱブランカ以外有り得ないみたいだ。

「卑怯だブランカ・・・」

僕を惑わして、僕を雄大な愛で包んで・・・
どうして、愛をくれるんだろう。
歪んだ僕を・・・

「・・・・」

冷たいな・・・
空っぽの身体に秋風は・・・
はぁ・・・

「ブランカ・・・」

なんなんだよ・・・
僕らしくない・・・

「なに百面相してんだよ」

だれ？

「アタシはミントっていうんだ」
「だから？」

やっぱりブランカ以外には冷たいな僕・・・

「アタシがブランカを連れて来ようか？」
「・・・・何者？」
「ブランカの親友だよ！！外国でのね」

信用して良いのか？
・・・はぁ。やっぱ変ったな僕。昔なら考えずにブっ飛ばしてたが・・・

「会いたいんだろ？」
「・・・」
「嫌なら良いが？」

コイツ・・・
黒い・・・
弱点突かれたな。

「会いたいよ」
「ふっ・・・じゃあ今電話すっから」
「なぁ・・・」
「ん？」
「未来のブランカは・・・卒業してからって」
「あぁ・・・未来は変るからな」

はあ！！？
僕が悩んでた意味は！？
ちょっ・・・

「はあああ！？」
「うるさい」
「っ・・・」

なんかムカつく・・・
だけどブランカのためだし・・・

「ブランカは・・・僕を知らない」
「・・・ん～アタシが知ってる理由を述べてみよ」
「は？」

たしかに・・・なんで知ってんだよ。

「お前も能力者？」
「違う・・・」
「じゃあ・・・」
「未来のブランカがアタシに電話してきて会ってみたかったんだ！！未来の親友の旦那を」

うわっ！！笑顔が可愛いこの子。
性格抜かせばブランカ並？
でも、それ以上に僕は旦那という単語に赤くなった。

「あーブランカ？」
「！？」
「日本に着いたよ？・・・ん～・・・それで・・・うん・・・来てって・・・誰って？・・・未来の旦那・・・ふざけて無いって！！」

ふざけてるだろ・・・
普通信じねーよ。

「・・・だから、来いって・・・容姿？・・・・可愛い感じでカッコいい・・・うん・・・お似合いだよ・・・・照れんなって！！」

自分が褒められてるみたいだ。恥ずかしい・・・
お似合いって・・・
ブランカと？
は、恥ずかしい。

「いつごろ？・・・・えーっそんなに掛かるの？・・・・そっか・・・・
分った伝えておく」

電話を切った。
なんなんだろう？

「来月になるって」
「なんで？」
「不機嫌になるなって！！手続きとか色々あるんだと」
「・・・そう」
「ってことは・・・」
「はい？」
「お前の親友も早く来るってことか？」
「なんで知ってんだよ・・・」
「全部電話で聞いたから」

ふ～ん。
あの男も来るのか・・・

「ってことで、明日から学校通うから！！」
「はあ？」

とんでもない奴と知り合った。
でも・・・
ブランカに会えるのか・・・
苛めてやろう・・・
僕に隠し事する罰だ。

Ｃｈａｐｔｅｒ７　抜け殻（後書き）

オリキャラがきましたね。あと数話で最後です。短編は作りますが・・・

Ｃｈａｐｔｅｒ８　親友ってなんだろう（前書き）

会えると分ったらスグに会いたいという気持ちになる。一緒にいたいと・・・親友って、こそばゆいよね。くすぐったいって感じ

Chapter8　親友ってなんだろう

あの女・・・ミントだっけ？
アイツが来るなら今日はサボる。
アイツとは相性が合わない。

「・・・ん？」

あー。
今時いるんだなぁ。
ガリ勉少年・・・
めんどくせーけど助けるか・・・

「お――――」
「・・・俺を甘く見たのか運の尽きだぜ」

話し掛けようとしたら、ガリ勉少年（仮定）は地を這うような低い声を出した。
ガキの声じゃねーだろ。

「『止まれ』」

！？
コイツ・・・
能力者？
まさか・・・未来の親友？

「ふぅ・・・だから構わなければ良かったのにな・・・・・・ん？誰だ・・・」

こっちに気付いた。
さあ、どうする？

「『今、見たものを・・・』」
「意味ねーから」
「・・・？」
「僕も能力者だから」
「！？」

やっぱり知らないんだな・・・
ってことはブランカでも・・・

「・・・アンタ」
「僕は相原アザミ・・・」
「・・・俺は西尾ヨメナ」

また花の名前か・・・
僕といい、コイツといい女っぽい名前だな。

「・・・能力者」
「それに・・・アンタが僕達をこの世界に飛ばしたのも知ってる」
「！！」
「アンタの未来に教えられたから」
「・・・俺の？」
「・・・先月会ったんだ」
「・・・」
「信じられないなら・・・」
「いや、信じるよ・・・俺なら出来るしな」

ホッとした。
信じてくれなかったら・・・とか考えてたから。

「あとなんか言ったか？」
「・・・し、親友になるって」

うわ～照れくさい！！
親友なんて言葉を使ったの無いよな？

「・・・親友」
「い、嫌だっか？」

「・・・いいや。初めてかもな親友なんて言われたの」
「・・・僕も・・・・あ、そうだ」
「ん？」
「未来のお前と約束したんだ」
「・・・約束？」
「・・・未来を変えるって」
「・・・・」
「だから、僕が何を言っても変に思わないで」
「あ、あぁ・・・・」

ヨメナは眼鏡を掛け直した。
未来のアイツは眼鏡してなかったよな？
見た目と性格のギャップが凄いな。

「・・・『ブランカに一生惚れるな』」
「？？？」
「僕の未来の妻らしいんだ」
「へぇ・・・・」
「でも、君が惚れたせいでおかしくなったみたいだ」
「俺が・・・・」
「それで・・・・」
「？？？」
「僕を殺したんだ」
「！？」
「・・・・」
「・・・・君の答えはそれなんだね」
「え・・・・？」
「・・・試させてもらった」

「まさか・・記憶・・・」
「ふっ・・・未来の俺なんていないんだ」
「どういう・・・」
「俺は未来へ行ったのでは無いんだ・・・」
「でも！！」

ヨメナは眼鏡を外した。
あ、コイツ・・・
白いスーツの奴だ。
なんで気付かなかったんだ？
未来の僕を殺したんじゃ・・・

「たしかに俺はお前を消した。だけど・・・俺は創始者だから」
「はい？」

また突拍子なことを言い出したよコイツ。

「・・・お前らは俺の子孫なんだ」
「・・・え」
「俺は・・・ブランカの能力も使える」
「！！」
「お前らは、俺の能力を受け継いだんだ」
「・・・でもブランカに」
「愛してたのは確かなんだ」

またズキッとなる。
親友と取り合うなんて嫌だ。

「俺は年を取らないし死ねない・・・つまり不老不死だ」
「・・・でも未来のお前は？」
「・・・さあ？」
「はい！？」

また頭が痛くなってきた。

「・・・でも、もう好きにはならない。お前が能力を使ったから」
「普通・・・効かないんじゃ」
「いや・・・“言葉”だけなら俺より強い。だから俺には、お前の呪縛を解けなかったし、お前は俺の呪縛を解いた」
「あれは・・・無我夢中だったし・・・」
「それでも解いたんだ・・・」
「お前・・・これからどうすんの？」
「・・・考えて無いな」
「・・・来月ブランカ来るんだってよ」
「へぇ・・・だから？」
「学園生活も良いなって」
「・・・」

うわ～。めんどくせーって面だ。
分るけどさ・・・

「・・・住むとこねーや」
「僕の家デカいから」
「どうせブランカと住む気だっただろ？」

！？
何で分ったんだ！！
赤いな顔・・・
くそー！！恥ずかしい。

「適当に探すさ」
「そう・・・」
「ブランカ来たら・・・会わせろ。多分、記憶戻るかもしれねーし」
「あぁ・・・」

早くブランカに会いたいなと、そう思っている。
誰かを待つなんて考えた事無かった。
あの時の自分は、ただがむしゃらに生きてたんだ。

Ｃｈａｐｔｅｒ８　親友ってなんだろう（後書き）

次らへんが最後ですね。短編では、未来編で変わる前のストーリーとか（ラブラブな話）

Ｃｈａｐｔｅｒ９　愛しい愛しい（前書き）

最終回です。まだ不十分です。だから短編を・・・リクエストあればできる限り答えたいです。

Chapter9　愛しい愛しい

「おーい！！」

うるさい。
ミントが呼んでる。

「うるさくて悪かったな！！会わせないよ？」

・・・

「すみませんでした」

くそー。勝てない。
ブランカを出されたら・・・
会ってしまったらコイツ潰す。ブランカに何を言われようとも・・・

「で？なんだよ」
「今日来るってよ」
「ふ～ん」
「反応薄いな」
「あ、知り合いが来るから」

「あ、アイツ？」

知ってたのか・・・・
ちっ・・・・

「・・・」
「どうした？」
「もう・・・あんな事無いよな？」
「あんなこと？」

なんのことだ？
何を・・・

「アンタが・・・死ぬってこと」
「！！」

いつも明るい奴が暗くなるとなんかおかしい。

「誰かが傷付くのは嫌だ」
「・・・」
「親友の未来の旦那なら特に・・・」

コイツ・・・バカやってるようでちゃんと考えてんだな。

「遅れた・・・」
「アンタが！！」
「落ち着けミント！！」
「誰だ？」

僕はミントを押さえるのに必死なのに、ヨメナは気軽に頭を掻いてる。
こっちの身にもなりやがれ！！

「ミント？」
「「「！？」」」

ドクン。
懐かしい声・・・
少し幼いけど・・・
脈拍が上がってる。
背後から聞こえた声に動揺してる。

「あ～久し振り！！ブランカ」
「うん！！」
「あ・・・」

声が出ない。

会いたくて仕方が無かったのに・・・
触れたい。
ブランカの髪は、未来よりも短い。同じ藍色で優しい雰囲気や笑顔は何も変わらない。

「・・・だれ？」

ズキッ。
苦しい。
分っていたことなのに・・・
ブランカは僕を知らないって分ってたのに・・・

「初めまして・・・俺は西尾ヨメナ。創始者でありお前らをこの世界に飛ばした」
「・・・貴方が」
「嫌ってくれても構わない」
「いいえ・・・ミントに会えたから私は幸せです」
「！！」

相変わらず変わらない可愛い笑顔だ。
ヨメナは普通だった。能力が効いてるみたいだ。

「ありがとな・・・全然惚れねーや」

ボソッと僕に話し掛けたヨメナ。
やっぱり、効いてるんだな。

「初めまして・・・？」
「あ、あぁ・・・僕は相原・・・」
「アザミくん・・・？」
「え・・？」
「なんか・・・スッと入ってきたの」

入った？
ヨメナがなんかしたんだろうな。前に話してたし・・・
でも、記憶は無い。
一緒にいた記憶。

「アザミくん？」
「んでもねーよ」
「アザミくん・・・私が嫌い？」
「なっ・・・」
「だって・・・何となく」
「逆だって！！」
「逆？」
「むしろ・・・好きってことだろ」

・・・僕の顔は赤いだろうな。
ブランカも赤い。
記憶が無くてもブランカはブランカだ。

それ以上でも、それ以下でも無い

「ブランカ・・・」
「なにかな？」
「住むとこある？」
「あ・・・」
「あ、アタシ・・・」
「黙れガキ・・・」
「なっ！！」
「アザミ自身がブランカに聞いてんだろ？理由考えろよ」
「あ・・・」

ボソボソと話してるけど、僕には聞こえてる。
っ・・・ケンカ売ってるのか？

「・・・一緒に住まわないか？」
「え・・・」
「安心しろって！！未来のブランカは一緒に住んでたらしいし！！」
「ミント・・・本当？」
「うん！！」
「そうだ・・・一緒にいたんだ・・・ずっと」

なんともないように振る舞ってるけど辛そうな表情になってるぞヨメナ。

「じゃあこれからよろしくね！！アザミくん」
「あぁ・・・たっぷり働いてくれよ？ブランカ」
「「アザミ～～！！」」
「ふふ・・・何か作る？」

やっぱりブランカは温かいな。
僕がどんなこと言っても困ったりしない。
だから甘えることが出来るんだな。

「取り敢えず焼きソバ作れ」
「うん！！」

愛しい。
もう・・・イラついたりしない。
まぁ・・・ブランカを好きになる奴が現れたら潰すけど。
この能力使って記憶消してやるしね。
その前に、会った男全員に能力を使うし。

「『ブランカに一生惚れるな』」

Ｃｈａｐｔｅｒ９　愛しい愛しい（後書き）

今まで読んでくれてありがとうございます。前書きにも書きましたが短編を続けます。

Ｃｈａｐｔｅｒ短編　甘い日常（前書き）

未来編です。アザミがブランカに溺愛していて、見るからにバカップルです。ヨメナが友情出演してます。

Chapter短編　甘い日常

「アーザミくん！！」
「なに？ブランカ・・・」
「好き！！」

・・・あああああ！！
可愛い！！
なに、この小動物は・・・
照れた赤い顔で好きって！！

「僕も好きだよ」
「私のほうが好きだよ！！」
「うるせー！！バカップル黙れ！！」

一人もんは寂しいな・・・
ヨメナは怒った。
まぁ、当たり前だけどさ。

「ヨメナくんうるさーい！！」
「うるさくねー！！」
「『黙れヨメナ・・・』」
「っ・・・」

卑怯で悪かったな。
先手必勝だよ。

「あぁ・・・能力使ったのね」

呑気だなぁ。
まぁ、そんなとこも可愛いけどさ。
ホントに麻薬だよな。
止められない。
しかも、昔の僕なら考えられないほど丸くなったし・・・

「丸すぎるよ」
「ホントに・・・ブランカが変えたんだよ僕を・・・」
「ふえ？」

なんだよ、その声。
もっと色んな声が聞きたいな・・・

「へーんたい！！」
「ち、違う意味だ！！って、また心読んだ！！」
「だって“書く者”の運命（さだめ）だもん」
「・・・ゴメン」
「違う！！悪いのはヨメナくんだ！！」
「っ～～！！」

自分は悪くないって・・・

「「悪いよ・・・」」

「！！」

ショック受けてるが無視。

どーでも良いし。

「アザミくん・・・」

「なに？」

「私のどこが好き？」

「そんな簡単なこと・・・全部だよ」

「えへへ・・・私もぜーんぶ大好き！！」

「・・・・っ！！」

バカップルで悪かったな。

それほど好きなんだよ。

「焼きソバ作って来るね！！」

「美味しいの期待してるよ」

「もちッス！！」

たしか昨日も一昨日も焼きソバだったような・・・
もしかして焼きソバしか作れないって事じゃないよな？
まぁ、美味しいし・・・
大好物だし・・・
文句は無いけどさ・・・

「たまには味噌汁も飲みたいよ」

日本人だし・・・

「出来たよー！！」
「はやっ！！」
「愛しい旦那様のためだもん！！」

はい。おかず、いりません。
その言葉がおかずだ。

「って・・・あれ？良い匂い」
「じゃーん！！味噌汁だよーん」
「・・・まさか聞いてた？」
「なにを？」
「僕飲みたかったんだ」
「以心伝心？」
「すげー嬉しい！！」

僕らって結ばれるために出会ったのかも・・・
恥ずかしいけど、そう思えるんだ。

「旨い」
「良かった！！」
「明日は鍋が良いな！！」
「・・・」
「ブランカは嫌いか？」
「すき焼大好き！！」
「いいな！！すき焼」
「でも・・・」

なんだ？
気に食わないことでもあるのか？

「やっぱりアザミくんが一番大好き！！」

くぅぅ！！
可愛い！！
抱き締めてやる！！

「く、苦しいよ！！」
「好きだ！！」

この時の僕らは、アイツの表情なんて見て無かったんだ。
だから、一歩づつ壊れてくのが気付かなかった。
調子に乗り過ぎて、傷付けた。

Ｃｈａｐｔｅｒ短編　甘い日常（後書き）

なんかアザミっぽくない！！次回はアザミの過去に迫りたいと・・・

Ｃｈａｐｔｅｒ短編　くだらない理想（前書き）

シリアスな現代編です。。。。 自分を変えてくれたのは他でもない愛しいキミだったんだ・・・

Ｃｈａｐｔｅｒ短編　くだらない理想

ただ。
ボクが歩く度に・・・
世界が回る度に・・・

「ボクを否定する」

醜いこの世界・・・
ボクを見る奴なんて・・・
本当のボクを見る奴なんて・・・いない。

「また来たぜ？化け物」
「先輩がやられたって・・・」
「来んなよな」

ムカつく・・・
ボクが何しようと関係無いじゃねーか。

「『いなくなれ』」

ほらっ。ボクの言葉でみんな消える。
だったら、世界のみんなを消せば良いのかもしれない。

「でも・・・臆病なんだ」

そんなこと出来ない自分。
逃げてるだけかもしれない。

「壊れてしまえばいいのに・・・・」

ボクを否定するまのなんて・・・・
消えてしまえばいいのに・・・・

「こんな能力(ちから)なんていらなかった」

苛立つだけの能力なんて・・・・
誰も救えない能力なんて・・・・

「誰か救って？」

本心なのかもしれない。
偽りを背負い続けるなんて・・・
無駄な願いを・・・

「誰か叶えて・・・」

ボクは・・・
この世界(ここ)にいるよ。
だから、誰か見付けて・・・

「『ボクを救う人に会いたい』」

小さい頃の願い（ちから）が叶ったんだ。
だって、隣りには・・・

「んっ・・・おはよアザミくん」
「あぁ・・・」
「どうしたの？」

いつものように笑顔を向けてくれる彼女。

「ガキの頃の夢を見た」
「・・・聞いても？」

「僕は独りだった」
「両親は？」
「・・・いないんだ」
「え・・・」

物心がつく頃には、施設で暮らしていた。
能力に怯える子供もいて、いや、みんなが怯えてた。
大人もみんな・・・
表面上では、作り笑いをしてたけど、すぐに分った。

「もしかして・・・本当の笑顔を見たの、ブランカのが初めてだったのかもな」
「それは光栄です」
「・・・もしブランカに会わなかったら僕は・・・・この世界を怨んだままだった」
「・・・未来の私がアザミくんが大好きだから変えようと頑張ったんだよ！！」
「あんまり頑張ってなかった気が・・・」
「もう！！頑張ったんだよ。きっと」

いや、頑張ったんじゃない。
ブランカの自然の愛が、僕の凍った心を癒したんだ。
たぶん、他の誰にも真似は出来ない。
やっぱり君は・・・
花の名前の通りなんだ。

「カサブランカ・・・」
「花言葉は雄大な愛よね？」
「詳しいね・・・」
「だって自分の名前だもの・・・」
「でも、僕は・・・」
「うん・・・薊（アザミ）は独立とか報復とか物騒よね」
「だからこそ・・・包んでくれるんだろ？」
「それ以上の愛で包みますよ」
「暑苦しくならない程度にな」
「相変わらず毒舌なんだから・・・少しは素直になれば良いじゃない」
「・・・これは一生かわんねーよ」
「ミントが未来の私から聞いた話だとね・・・未来の私達はラブラブでバカップルらしいよ」
「・・・・最悪」
「ひどい！！」

実は、そんな光景を見てみたいと思ってた。
あと、いつかそんな風になれたら良いと。
昔の冷たいボクは消して、今の僕で歩いて行くんだ。

「『幸せという長い道を』」

Ｃｈａｐｔｅｒ短編　くだらない理想（後書き）

毒舌を言っても何をしても、やっぱり一番はキミなんだよ。アザミくんはツンデレですね（今さら！？）

Ｃｈａｐｔｅｒ短編　理由の中で（前書き）

短編が続いてます。ヨメナ目線です。

Chapter短編　理由の中で

「ねぇ・・・ヨメナくん」
「なんだ？」
「どうして私達をこの世界に？それより未来の私が先祖って言ってたよね？でも、ヨメナくんは・・・私達を、って」
その話か・・・あ、ヤバい・・・勘違いしたな。
「・・・悪い」
「へっ？」
ブランカは変な顔をした。俺は、そんなブランカを笑った。ブランカは赤い顔をして怒った。
「・・・お前らの先祖と勘違いした」
「・・・過去の記憶もあったの？」
コイツ・・・バカだったような気がしたが冴えてるな。
「ある・・・俺が一緒に来たからな」
「私の先祖とアザミくんの先祖は似てるの？」
今の・・・という意味だよな？
「あぁ。似てるなんてもんじゃない。同じなんだ」
「そっか・・・」

そういや・・・おかしい。なんでコイツ記憶あるんだ？

「その事なんだけど・・・アザミくんと暮らしてたら戻っちゃった！！」

読心術は、この際気にしない。が、やっぱり暮らしてたんだな。しかも、顔を赤らめながら手を組むな・・・可愛いって思ってしまう。

「・・・で？」
「なにがだ？」
「どうして飛ばしたの？」
「・・・いつか話すから」

俺の悲しい表情に口を閉じたブランカ。何も言わないと分かったのか、必死に別の話を探してる。そんな姿も、昔や未来と変わらず可愛い。

「そういや・・・アザミは？」
「・・・」
「ブランカ？」

いつも、嫌という位側にいるのに今日は、全くいない。
ブランカは言おうかどうか迷って・・・

「過去を探しに・・・かな？」
「・・・過去？」
「どうして・・・両親が見捨てたのか」
「・・・それは見つからないだろう」
「え・・・」

目を見開いたブランカ。なんで、という風だった。

「・・・アザミに伝えろ」

「伝え・・る？」

「アイツは――――」

全てを聞いたブランカは、驚き目に涙を浮かべた。

嘘、と信じたくないような表情をして。

「私達・・・は？・・・未来の私達は・・・知って・・・」

泣いてるせいか呂律が回っていない。呼吸もし辛そうだ。

「未来のお前らは知って愛し合ってんだ」

「！！」

「支えてやれよ・・・カサブランカ」

「・・・・うんっ。ありっがとっ」

泣くな。俺がアザミに怒られる。

正直、言うか迷った。こんな表情にさせてしまうから。でも、こいつらなら乗り越えるって思ったんだ。

「ありがとな・・・ブランカ」

「え・・・」

「俺は最低な人間だからな」

「違うっ！！ヨメナくんは良い人だよ！！」

なんで一緒なんだよ。未来のお前と過去のお前。同じセリフで、自分を責めた俺を癒した。

泣きそうになるな・・・コイツは俺がどう思ってるか分かんねーんだよな。

「お前の大事な人を殺したんだぞ？」

「・・・理由は分からないけど、ヨメナくん優しいよ？」

責めてくれた方が、俺は楽なのにな。それなのに、全く責めない。

「にゅっ？」

「はあ？」

なんだ？変な声出しやがって・・・

「私帰るね！！アザミくんが帰って来たみたいだし・・・」

俺に手を振って、走り出したブランカ。

「・・・はぁ」

「何、溜め息吐いてんだ？」

「うぉっ！！」

なんだミントか・・・背後から声を掛けてきたからビックリしちまった。

「あのさ・・・」

「ずっと気になってたんだが・・・」

同時に話し始めたから、数分位黙ってしまった。

「なに？気になったって・・・」

「ずっとな・・・」

なんで赤くなってんだ？どうでも良いか。

「どうして、ブランカと知り合ったんだ？」

「そっち？」

なにがだ？何が“そっち”？

「ブランカのお母さんと私の母は親友だったの・・・それで、事件が起きた」

「！！」

先祖と同じ事件が起きたようだ。血が繋がってるせいなのか・・・

でも、流石にアイツらなら乗り越えられるだろう。

「そういやアンタの話は？」

「あ・・・今度、近くの神社で・・・・お、お、お祭があるみたい」

「へぇ・・・」

だから何なんだよ？意味分らない。

「一緒に・・・行かない？」

何で顔を赤らめるんだよ。たかが行こうってだけなのに・・・

「だ、ダメ？」

ドキッとした。赤い顔で上目遣いだからだ！！断じて好きというわけじゃねーからな！！

「・・・あ、ああ。行こう」
「ホント！？」
なんで吃ったんだよ。しかも、了承しただけで笑顔になるなんて・・・
「じゃあ・・・・来週に」
楽しみにしてる自分がいるのがビックリだ。
来週は空けとかないとな。

Ｃｈａｐｔｅｒ短編　理由の中で（後書き）

次の話にはヨメナが言ったことが分かります。

Ｃｈａｐｔｅｒ短編　生まれ理由（前書き）

前回の謎が分かります。アザミ目線です。

Ｃｈａｐｔｅｒ短編　生まれ理由

僕は、憎い記憶しかない場所に来た。
憎いなら来なきゃいいって思うだろうが、僕自身が変わらなきゃいけないんだ。
これからのためにも・・・

「じゃあ行って来る」
「うん・・・気をつけてね」

ブランカと会話してから家を出た。ブランカは出かける予定があったらしいが、僕は対して気にして無い。

「・・・はあ。まだ怖いんだな」

ムカつくほど懐かしい建物が見えてきた。
蔦が巻かれた対して大きくない建物。錆びれた門を開けて入った。
鳥肌が立つ嫌な音を立てて開いた門に、ビクッとした。
入ると見知らぬ子供達が遊んでる。知らない僕が来たのを気にしながらも遊びの続きをしてる。

「君は・・・」

僕を見た途端、懐かしい顔をした初老の男が現れた。

「・・・っ園長」
「久し振りだね。アザミくん」

昔より白髪も目立ちシワも増えた。顔をクシャッとさせながら笑って話した。

「君が来たということは・・・」

「両親のことで・・・」

僕の表情で何を言いたいのか分ったようだ。そういうところは、昔から何にも変わんない。

唯一の大人の中で、僕を認めてくれる。

園長は僕を応接室に連れて来た。

ここは、昔から悪戯をするとこの部屋に連れ来られて説教をされてた嫌な記憶しかない。

「この部屋・・・懐かしいだろ」

「はい・・・」

苦笑い気味に言ったら、園長は、ウワッハッハッと豪快に笑った。

「さて・・・話だったな」

園長はコーヒーを僕に差し出してから座った。

「ありがとう・・・話は・・・」

「君の両親はな、詳しくは分らないんだ」

え！？どういう意味だ？

「アザミくんが、来た時・・・赤ちゃんの頃に君の御両親が来たんだ。それで・・・」

園長は懐かしそうに目を細めた。

・・・・過去・・・・

「どうかしたのかい？」

「あの・・・園長さん。この子を・・・・お願いします」

黒い髪が汗のせいか、額に張り付いている。女は、その髪を直すこと無く、自分の赤ちゃんを優しく支えながら、園長に話をしている。

「訳を話して頂けませんか？」

「・・・すみません」

目を伏せてる女。訳を話せないようだ。

「将来、貴女の御子息が聞きたくても？」

「っ・・・あの子には、私達のように苦しんでほしくないの」

女は言いたいことを言ったら走りさって行った。微かに目には涙が浮かんでいた。

「どういう・・・意味でしょうか」

訳が分らないまま、自分を見つめて笑ってる赤ちゃんを見ているしか出来なかった。

「・・・というわけです」

「・・・・・」

園長は全て話し終え僕を見た。

っ嘘だ。両親は僕を捨てたんだと思ってた。信じたくない。今まで僕を捨てたんだって、ずっと恨んでたのに・・・それなのに・・・

「そう・・・」

「すまないな・・・詳しく話せなくて」

寂しく喋った園長に焦った。園長は何も悪くない。

「・・・では、僕は帰ります」

「あぁ・・・また来なさい。例え何があっても、ここは君の家だか

らね」
「！？」

家？ブランカと一緒の家だけが僕の居場所だと思ってた。

「何だかんだ言って皆アザミくんのこと心配してたんだよ。悪口とかあったかもしれない。それは子供だったから。たまに連絡を取り合うんだ。そうすると、みんながアザミくんのことを聞くんだよ」

くっ。泣くな。こんなところで・・・
信じたくない、信じたくない、信じたくない・・・

「無理して我慢すること無い。泣きたいなら泣けばいい。君には、もう甘えれる場所があるんだろう？」

なんで分るんだ？僕にはブランカがいる。ヨメナがいる。ミントがいる。

「私だって・・・これでも君の親だからね・・・もちろん他の子達もね」
「・・・っ・・・ありがとう・・・ございます」

僕は堪えれなくて涙を流した。信じても良いんだよな？もう、怨まなくても良いんだよな。

「おかえりなさい！！」
「ただいま」
僕が帰ると、笑顔で迎えるブランカ。
いつものように、ブランカにキスをして家に上がる。
「・・・アザミくん」
「なに？」
席に着くとお茶を出して、ブランカも座る。座ったらブランカは、話し出した。
「今日、ヨメナくんに会ったの」
「うん・・・」
この際、ヨメナをブっ飛ばすと考えたのは無視して話を聞いた。
「ヨメナくんはアザミくんの両親を見つけることは出来ないって・・・」
「あぁ。見つけることは出来なかったよ」
「その理由はね、両親・・・私の両親もだけど自分の能力で消えたんだって」
どういう意味だ？ブランカの両親も・・・それに消えたって・・・
「その理由は・・・・“愛”だって」
「あい？」
「ホントは私達の両親達が愛し合ってたの」

なるほど。だけど、別の人とくっついたんだ。
でも、なんでだ？

「・・・それ、私のせいかも」
「ブランカの？」
「正確には、私達の一族かな」

そういえば、ブランカは秘密にしてた事があったな。なんで、秘密作るんだよ。僕が頼りにならないか？

「でも消えるって・・・」
「・・・能力で自分達をこの世からいなくなれって・・・やっぱり好きだったから・・・他の人と愛せないんだって・・・昔から変わらなかったみたい」

なんだよ、それ・・・僕達が、くっつかない限り一生そうなのかよ・・・消える理由は何だよ。

「私の母さんが能力者で父さんは普通の経営者だったの」

経営者が普通かどうか分らないけど・・・

「僕の父が能力者・・・・・？」
「アザミくん？」
「・・・おかしい」

何かが変だ。
僕の発言に頭を傾げるブランカ。

「園長は、女が僕を孤児院に渡したって」

「で、でも！！」
「ああ。僕の父が能力者だろう。祖父も・・・」
じゃあ・・・
「「女は何者？」」
ブランカも不思議に思ったようだ。
女は、知っていたんだ。父が消えることを。もしかして、話したのか？能力のことと、消えることを・・・
「なあブランカ・・・お前の父さんは？」
「・・・行方不明」
どういう事だ？消されたいのか・・・自ら消えたのか・・・
「あのね、私のお父さんもアザミくんのお母さんも、それぞれ愛し合ってた。それは確かなの。でも、真実を知って一緒に消えることを望んだの」
「子供を放置してかよ。子供より自分達が大切なのかよ！！」
更に嫌いになった。ムカつく。
「でも、消えなくて良かった」
「え・・・」
「アザミくんに会えたから！！」
笑顔で僕に言うブランカ。それが愛しくて、心の中の黒い靄が消えようとしていた。

「・・・僕も思ってるよ。ブランカやヨメナやミントに出会えたから」
「もしかして母さん達は、未来で楽しいことも知らないままいなくなって欲しくなかったのかも・・・」
「例え、辛いことばかりでも・・・楽しいこともあるから・・か」

それだけのために？もし、ブランカ達に会わなかったら、僕は怨んだままだった。知ってたのかな？先祖達は、こうなることを・・・いつか、愛し合うことも・・・

「私・・・もう過去に囚われない。今を愛して、今を生きるんだ」
「そうだね・・・デコボコ道でも綺麗な道でも、歩いて行くさ」

これ以上、誰も悲しむことのないように、愛した人を泣かせないために・・・僕は戦い続けるよ。

Ｃｈａｐｔｅｒ短編　生まれ理由（後書き）

ちょっと意味が分りにくいかもしれません。

Ｃｈａｐｔｅｒ短編　彼女の理由（前書き）

ブランカの秘密が分かります。今まで書いて無くてすみませんでした。

Chapter短編　彼女の理由

「いい加減に教えてくれ」
「何を？」

本当に知らない顔をするな。ムシャクシャする。

「お前が秘密にしてることだ」
「！！」

ブランカは驚いたあと泣いた。なんで泣くんだよ！！僕が何かしたか？聞いただけだろ！！

「・・・いずれ言わなきゃいけないって分かってた」
「・・・うん」

やっと話してくれるんだな。本当に聞いて良いのか？ブランカが悲しむほど辛い話を無理矢理聞くんだから・・・

「未来の私、ご飯を全然食べて無いよね」
「そういや・・・」

でも、今のブランカも食べてないな。

「私の能力って、心読めるの知ってるよね」
「ああ・・・」

厄介だけど、小さい頃から大変だったよな。嫌でも人の心が分っ

てしまうから。でも、それと何の関係があるんだ？

「代価っていえば良いのかな？」

代価・・・あることをするために払う損害・犠牲。

「私の生命力を使ってるの・・・私の能力は・・・」

「まて！！未来のブランカは何も影響無いって！！」

「アザミくんには・・・ってこと」

ふざけんなよ！！今まで黙ってたのかよ。んな大事なこと。

しかも、それをヨメナは知っていた。それが更にイライラさせる。

「食欲が無いのは身体が弱ってるってのもあるの・・・」

「・・・死ぬ、なんてこと無いよな？」

「うん。まだ大丈夫・・・」

まだ？ということは、いつかは消えるのか？僕の前から・・・いなくなるのか？

「・・・お願いだから、秘密を作るな。僕に全部教えて」

いつから束縛する男になったんだろう？

「うん。もう秘密は無いよ」

「本当に？」

「怖かったの・・・真実を知ったら私を捨てるかと思って・・・」

僕はブランカを捨てるなんて有り得ない。こんなにも執着してるから。

「愛してるから・・・愛してる・・・だから僕から離れるな。居なくなっても捜しに行く。前みたいに、絶対捜しに行くからな」
「・・・アザミくん」

ブランカが泣きながら僕に抱き付いてきた。
ブランカから甘い香りがする。優しい香り。誰でも癒す愛しい香り。

「誰にも渡さねーから」
「私も・・・渡さない」

神様、愛し合う時間をください。長く永く、ずっと側に居させてください。そのためなら僕は、ブランカの敵と戦い続けますから。だから、永遠という時間をください。

Ｃｈａｐｔｅｒ短編　彼女の理由（後書き）

べた惚れだけど未来編ではありません！！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3255f/

花菱草(私を拒絶しないで)

2010年10月17日06時45分発行